

「学校に対話を」 アメリカの最前線報告

竹村登茂子（大阪芸術大学）

バックス モンベ ト学園 ツレヘム 校

- ペンシルバニア州にある私立学校で州内6校の中心的存在
- RP(Restorative Practices) を早くから実践した米国の中学教師、テッド・ワクテル (Ted Wchtel) が1977年に創設
- 背景に、問題行動を起こす少年たちの「社会資源不足」の実感
- 学校は「オルタナティブ・スクール」(代替学校)の区分
 - 「人気のある革新」タイプ、「ラストチャンス」タイプ、「集中矯正」タイプ 同校は「集中矯正」？ 授業内容は他校とほぼ同じ。
 - 7年生～12年生(12～18歳)の男女が随時、転入。平均在学9ヶ月。学費は全て、州が払う

ベツレヘム校

- (上) 学校の正面玄関。学校はビルの中にあり、時間きっかりに先生がドアを開けて生徒たちを入れる。
- (下) 休憩時間の生徒たち。ごく普通の子供たちだ。



社会資源不足を補う、RPの流れ
→この5つを一つの流れとして学校内で常時、行う
(ワクテルのRPハンドブックから)

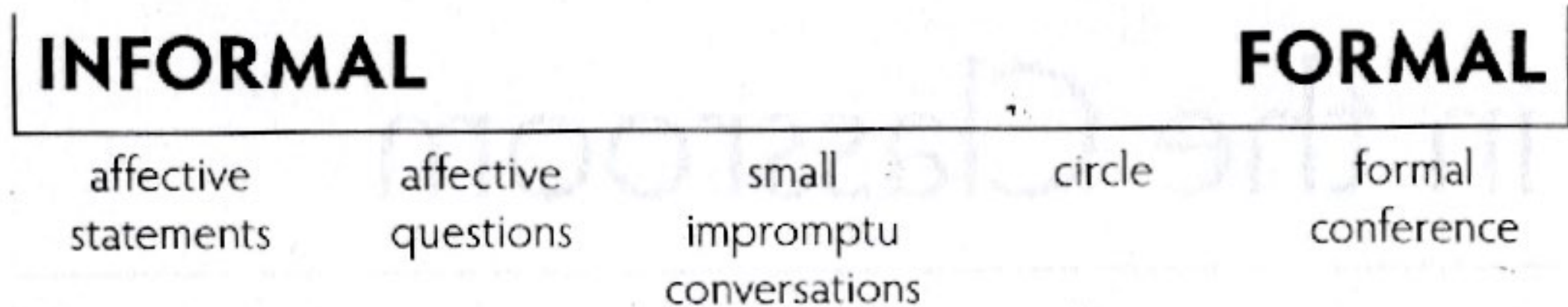


Figure 1. Restorative Practices Continuum.

サークルの種類 ① 事前予防的サークル

= 日常的なサークル

- 授業前に集中力を高めるために行う
- 生徒同士の理解を深める
- 授業が荒れ始めると、集合して行う

- 例) 「今日の朝ごはんは何？」 — 「それ好き」 「俺は嫌だ」
- 「一番苦手な言葉は？」 — 「努力」 「勉強」 「早起き」
- 「好きな時間」 — 「ダンスしてる時」 「寝ている時」
- 「授業を進めるために自分は何ができるか？」

② 事後対応的サークル

問題を議論する「チェックイン」サークル

問題を起こした生徒が、問題点を理解するための内省

+

問題を起こした生徒からの「内省」の報告に対し、「フィードバック」として他の生徒たちが問題点を指摘する。その後、所属していたコミュニティ（クラス、学校）がその生徒をどう受け入れるか、を議論するためのサークル。

例) 「僕は学校でタバコを吸い、見つかったも嘘をついて、みんなの授業を遅らせた。許してくれますか？」

——「禁止されていることを守ろうとしていない、それでは社会にでてルールを守れない」「先生を騙そうとした、それは許されない」

問題が発生した時、生徒が問われる修復的質問

RESTORATIVE QUESTIONS I
TO RESPOND TO CHALLENGING BEHAVIOR

- What happened?
- What were you thinking of at the time?
- What have you thought about since?
- Who has been affected by what you have done? In what way?
- What do you think you need to do to make things right?

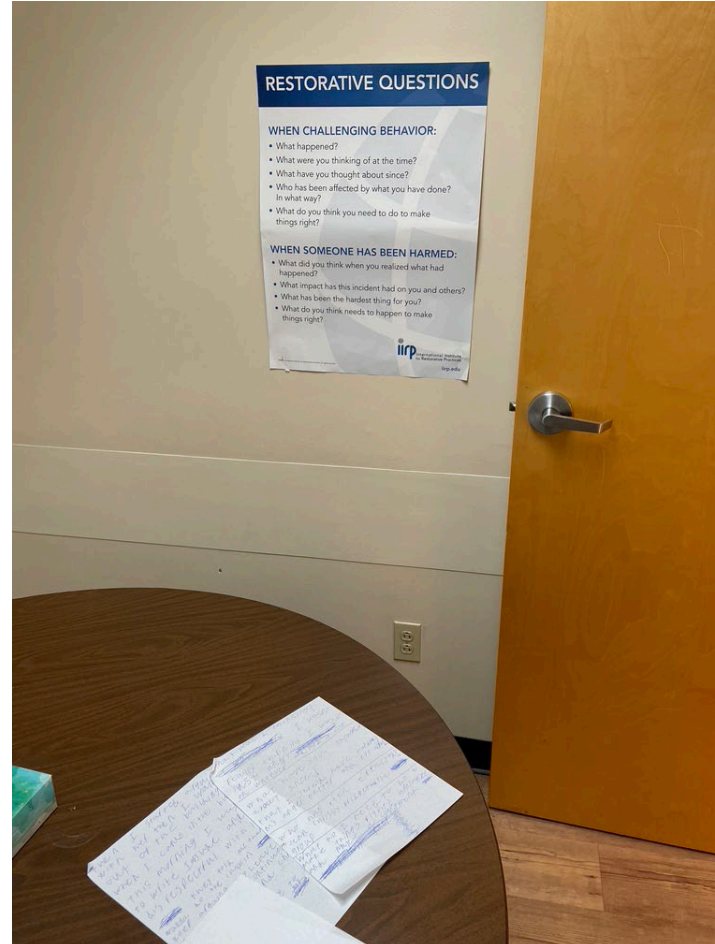
iirp International Institute for Restorative Practices
iirp.edu

©2016 IIRP Graduate School

RESTORATIVE QUESTIONS II
TO HELP THOSE HARMED BY OTHERS' ACTIONS

- What did you think when you realized what had happened?
- What impact has this incident had on you and others?
- What has been the hardest thing for you?
- What do you think needs to happen to make things right?

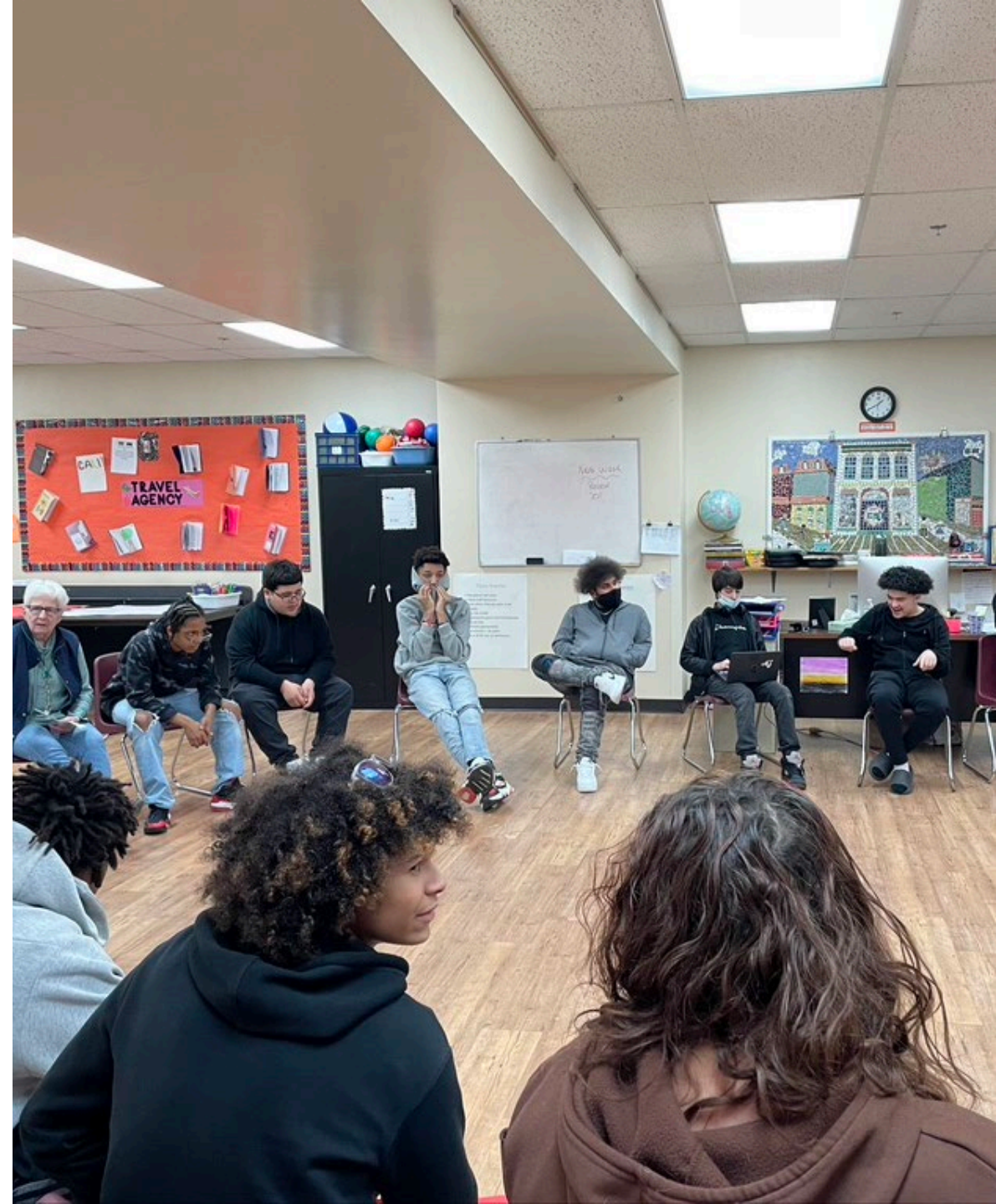
©2016 IIRP Graduate School



- 左) RPの質問。「何が起こったのか」「その時、何を考えたのか」「どうすれば良かったと思うか」など5つの質問
- 右) RPの5つの質問を考える小部屋。問題を起こした生徒はここに入り、一人で考えて文章にする

2種類の サークル

- 左下は、通常の授業前のサークル。「今日は何を食べてきたか」「授業で何をするか」などを話し合う。
- 右は、チェックインサークル。関係する全ての生徒や教師が参加するため、大規模



即興的
サークル
＝グループ・ダイ
ナミズム
の授業

サークルを主導するのは
「カウンセラー」

担当する授業が「グルー
プ・ダイナミズム」

授業の目的は、人への「理解」

大人が心がけるのは、「本音を話す」
「人間味を見せる」

グループ・ダイナミズム授業

「自分が最も難しかった時について」

5年前にお父さんが刑務所に入った時。

父と母が1年のうちに両方、亡くなった時。

おじいちゃんがガンだと分かった時。

(カウンセラーが) 私の夫がALSだと分かった時。



学校全体を援助する教師の存在

- 特別支援（学習障害、衝動的行動、ADHDなどを持つ）生徒を常時、教科やカウンセリング以外で見守る存在＝特別支援教員
- この教員が行うのが、「フォーマルカンファレンス」
- →生徒の進路について、教育委員会と定期的にカンファレンスを行う。
- その場には本人も同席し、自分で要望を伝える。

特別支援教員

- 各クラスを回り、生徒が授業についていけない場合などに、教師にアドバイスを
行う。手にしているのは、数学で掛け算がわからない生徒に
使う補助具



対話・サークルの成果、とは何か

- 学校環境が安全になる



- トラブルが減る
 - 停学率が減る
 - コミュニティへの信頼度が上がる
 - 学校文化が変わる
-
- 結果的に、学習できる環境が整い学力が上がる

生徒たちの感想

A (19歳) 「初めてサークルを見た時、stupidだと思った。こんなことする忍耐力はない。でも、やるべきことをやるしかないと言われ、2ヶ月ほどやってみて初めて、自分の発言を真剣に受け止めてくれたのが一番の驚き。自分のいうことが誰かの役に立っていると実感した」

B (14歳) 「チェックインを受けた時、すごく後悔と恥ずかしさを感じた。こういうことを感じないために自分で対応しないといけないんだと思った。公立学校ではこんなこと感じない」

C (16歳) 「サークルは、最初はバカみたいと思ったけど、だんだん人のいうことがわかるっていうメリットが分かってきた。人にフィードバックをする時、自分で言葉を選ぶようになった。こういうことが俺もできるんだって思った」

課題

- 絶対に受け入れない生徒の存在

「絶対に僕は悪くない」「サークルで話しなどしない」という生徒を、他の生徒とトラブルを起こさずにどう共存させるのか

- いかに忍耐強く生徒の言い分を聞く「教師」が育つか

同校の趣旨を理解しながらも、辞めていく教員もいる。どう熱意を育成するか。特に「教科」を教えたいという専門性との兼ね合い



生き生きする生徒たち

